



### Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻教授

林 上 (HAYASHI Noboru)

1975年名古屋大学大学院文学研究科博士課程修了。『中心地理論研究』で文学博士(名古屋大学)取得。日本都市学会賞受賞。中部都市学会会長、名古屋地理学会会長、港湾経済学会中部部会会長。専門は都市経済地理学。

kfr00430@nifty.com, <http://homepage2.nifty.com/ascend/noboru.htm>



## グローバルとローカルのはざま



### 海と母の関係

「日本語では、海の中に母があり、フランス語では母の中に海がある」といわれる。これは、「海」という漢字の一部が「母」という字であるのに対し、フランス語の母すなわち la mère の中には la mer (海) があるということの意味する。海も母も普遍的存在であり、内陸の国や人の住んでいない場所は別として、世界中どこへいってもお目にかかることができる。ある普遍的存在の中に別の普遍的存在が潜んでいるという事実には、単なる言葉遊びの域を超えて興味深い。しかしよくよく考えてみれば、海も母ともに普遍的存在とはいえ、それらは個別の海や母を集めた集合体から成り立っている。瀬戸内海、

地中海、北海、北極海などなど、海水の成分や水温・水深などの異なる個別の海域を総称して、われわれは海と呼んでいる。同様に、人種、民族、国家などの違いを問わず、子供をもつ女性をなべて母と称しているのである。そこには普遍と固有、一般と特殊の関係が成り立っている。海や母の一般的性質に注目するのか、あるいは個々の海や母の特質に目を向けるのかの違いである。



写真2 メルボルン・セントラルは都心のショッピングセンターで、かつて鉛の玉を製造した歴史的建造物ショットタワーを取り込むために、高さ84mのガラスの尖塔までつくった。(2010年9月)



写真1 シドニーで1,2を争う有名なボンディビーチ。波はやや高め、サーファーや海水浴客に人気がある。(2008年1月)

### 普遍と個別の関係

実は、普遍と固有、一般と特殊は地理学において長い間、論争が続けられてきたテーマである。第二次世界大戦後、普遍性・一般性を重視する科学としての地理学の樹立が強調されるようになり、それまでの個別事例的な地誌学、つまり場所や地域の固有性を記述する伝統的な地理学を遠ざける雰囲気学が学界を支配した。空間的現象の中に一般的な法則性を見だし、モデルや理論を構築して現象を説明しようとする地理学が優勢になった(Johnston, 1983)。背景には戦後経済の

高度な成長があり、工業化や都市化によってダイナミックに変化していく現象を統計的、計量的な研究手法で解き明かす必要が社会的に要請されるようになった。いまだ萌芽的段階ではあったが、コンピュータサイエンスがもてはやされるようになり、科学的方法によって空間的現象はすべて解明できるというような楽観的風潮が蔓延した。たしかに、発展めざましい科学的な研究方法のおかげで、それまで明らかにできなかった事実がとらえられるようになった。地域に関する膨大な情報をコンピュータで処理すれば、何らかの結果は得られる。それがこれまで勘でしかつかめなかった傾向やパターンであれば、コンピュータの威力は信じざるをえない。



写真3 チェコのチェスキークルムロフ。チェスキーはチェコ語でボヘミア、クルムロフは「川の湾曲部の湿地帯」という意味。(2008年8月)

## 森から木へ回帰する動き

しかし、その後に行った地理学の歩みを振り返ると、科学的な地理学をめざす動きはそれほど長くは持続しなかった。都市問題や環境問題が各地で噴出するようになり、空間的現象をモデルや理論で説明するだけでは物足りなくなった。地域や都市を資本主義経済の本質にまでさかのぼって構造的に解き明かす思想や、個別の人間の多様性に注目した人文主義的なアプローチが提案されるようになった(Harvey, 1973; Badcock, 2002)。背景には社会や経済の変化がある。1970年代の石油ショックを境に、画一的な大量生産



写真4 1936年にベルリンオリンピックが開催されたスタジアムの最寄り駅。(2009年9月)

をよとするフォーディズム(モダニズム)から、多品種少量を柔軟に生産するポストフォーディズム(ポストモダニズム)へと経済のシステムが大きく変化したことがとりわけ大きい要因である。全体よりも個に、一般的傾向よりも個別の動きに対して関心が向けられるようになった。

研究を単に個人的な興味だけで判断することは慎まなければならない。しかし研究者は、興味を引くものにはより強く惹かれる。コンピュータが登場して間もない頃は、統計的、計量的手法をもちいて空間的現象を説明することに研究者は大いに興味を抱いた。しかしそうした手法が普及し、学生の卒業論文程度でも利用できるようになると、手法に対する関心は低下した。むしろ、そのような手法では明らかにしにくい現象の個性や固有性に関心が向かうようになった。森全体の特徴を大づかみに把握することは現在でも素晴らしい。しかし森の中で生きている一本、一本の木の中に解き明かすべき秘密が隠されているのも事実であり、むしろ研究者はそのような側面に興味を抱くようになった。

## 地域地理学・地誌学の復権

石油ショック以降の地理学はポストモダン

の地理学であり、多様性に満ちている。文化的多様性を軸に、まさに何でもありの様相を呈している。しかし、あまりに包容力を高めて何でも許してしまうと、研究としての収拾がつかなくなる(Pacione, 1997)。普遍性や一般性を過度に強調する画一的なアプローチはもはや時代遅れであるが、かといって思いつきやアイデアだけで方法論もろくない研究は支持できない。両方の良いところをうまく吸収しつつ、時代の動きを適切にとらえる研究スタイルがバランスもよく、いまの時代には適している。以前は地誌学と呼ばれ、現在は地域地理学といわれる地理学があ

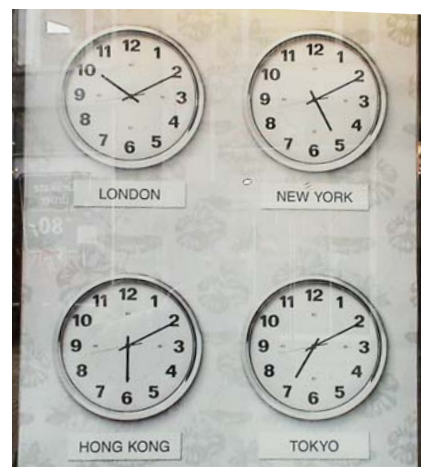


写真5 国際旅客船が発着するヘルシンキ港の世界時計(2007年9月)

る (Hartshorne, 1939)。復権したこの地理学は、以前の地誌学とは異なる。モデルや理論の有効性が明らかになった以上、それを無視することはできない。しかし、それらのみで地域をとらえるにはあまりにも不十分といわざるをえない。美しい数学的モデルや統計的処理では抜け落ちる現実の多様性、複雑性を見過ごすことはできない。全体の傾向や位置づけを明らかにした上で、個別の特性に深く切り込んでいく。こうした両刀使いが、いま求められている。

## グローバル(普遍)とローカル(個別)の関係

普遍と個別の間の相互関係は、グローバルとローカルの間にもみとめられる。グローバルは全地球であり、その中に個々の国や地域、都市が含まれる。あまねく世界全体を見渡そうというスタンスと、特定の地域や都市にこだわり、そこでの活動を重視しようという考え方の間には対立がある。しかし、世はまさにグローバル化で浮き足立っており、ともすればローカルな側面は見落とされがちである。グローバルスタンダードが広まってくことは、世界中どこにいても同じように振る舞えることを意味している。いったん慣れてしまうと、その便利さを否定することはむづかしい。実際、グローバル化以前と比べると、人の移動やコミュニケーションはしやすくなった。地球規模での交通・情報インフラが整備されたことで、われわれは意識するか否かは別として、すでにグローバル社会の一員として組み込まれてしまっている。移動やコミュニケーションの自由を一度味わってしまったら、二度と昔に戻ることはできないであろう。

グローバルとローカルは対立的概念としてとらえられることが多い。グローバル化が地域社会に浸透したため地域に固有の文化や生活習慣が失われていくという事例は少なくない。だから地域固有の文化や習慣を守るべきだという議論も多い。しかし考えてみれば、グローバル化は強制されて広まってきたわけ

ではない。もちろん、過去には植民地化や戦争によって異国の文化やスタイルを押し付けたという歴史はある。しかし現代のグローバル化は、それとは違っている。積極的か消極的かという程度の差はあるが、自ら受け入れることによって、これまでそこになかった文化やスタイルが広まった。結果だけ見れば、外来のものが地場のものを追い出し駆逐したように思われる。置き換わった場合は、古いものが新しいものに取り替えられたということになるが、これまでなかったまったく新しいものが入ってきたという場合も少なくない。そのような場合は、追い出しとか駆逐といった言葉で表現するのは適切ではない。

## ローカル化されるグローバル

グローバル化はたしかに強力である。強い浸透力をもっているがゆえに、地域の隅々にまで入り込んでいく。しかしよく観察すると、入り込んでいったグローバル的なものは、その地域で受け入れられるさいに何らかの局地化作用を受けることが少なくない。ローカライズされるのである。一般性(普遍性)の中の多様化(差別化)といわれる現象がこれであり、世界的なハンバーガーチェーンが、進出した土地で取れる食材をメニューの中に取り込んでいる事例がその一例である。このような場合、グローバル化とローカル化は対立的であるとは必ずしも言い切れず、むしろ補完的關係に近い。これはある意味、文明と文化の關係に似ている。文明とは、動物とは異なり、人類一般が共通して行っている高次な精神的活動のことである。ただし同じ文明でも、その中身は場所ごとに異なっており、その場所の環境条件のもとで固有のスタイルを示す。これが文化である。言語の違いに典型的に現れるように、活動様式としての文化には地域差が大きい。人間は、文明という普遍的なものによって包含される地域差の大きな文化を、それぞれ固有の財産として生み育て上げてきた。

## 個別と普遍の緊密な結びつき

近年、加速度的に広まっていくグローバル化は、ジェット航空機やインターネットなど発明・実用化されてまだ日の浅い技術革新によって押し進められている。こうした「文明の利器」を活用した企業が地球上に市場を見だし、あまた商品群の生産や販売に奔走している。その結果、人々の暮らしは豊かにはなったが、画一的文化の蔓延という代償を払わざるを得なかった。グローバル化を受け身的に考えれば、たしかにこのような図式として説明されよう。しかし見方を変えてグローバル化のメリットに注目すれば、「文明の利器」を大いに活用してその地域の文化を深化するという戦略も考えられる。もともと文化は受け継がれていく過程で何らかの影響を外部から受けるものである。伝統的スタイルを後生大事に引き継ぐだけでは、文化の持続性はない。社会や経済が変化していく以上、その地域の文化も変わっていくのが自然な姿である。

グローバル的なものが広まっていくのは、普遍的な価値がそれぞれの地域で評価されているからである。普遍性をもっている全地球的な価値の力は強く、これがあるゆえに歴史や文化の異なる国や地域も互いに結びつくことができる。インターネットはまさにその象徴的存在であり、個人の思想・信条の違いに関係なく、通信基盤の条件さえ整えば地球上の誰とでも意思の疎通を図ることができる。個人は情報のかたまりであり、それだけにプ



写真6 チェコのプラハで見かけた寿司店の看板。(2007年8月)



写真7 帆船を模した構造が複雑すぎて完成が大幅に遅れたシドニーのオペラハウスは、2007年には早くも世界遺産に登録された。(2008年1月)

ライバシーは尊重されなければならない。その個人が情報分野に限定されるとはいえ、濃密な情報網によって結びつけられているのが、現代社会である。そのようなネットワークがあるがゆえに、われわれは日々、快適な生活を送ることができる。きわめて多様な個別的な存在としての個人が、非常に普遍的な全球的規模で張り巡らされたネットワークにつながっている。まさに個別と普遍が緊密な関係で同居しているのが、現代社会なのである。

### 個別的な存在としての人や地域の価値

インターネットに代表されるグローバルなインフラの価値は疑うべくもない。しかし同時に知るべきは、個別的な存在としてつながっている個人がもっている価値の尊さである。個人のライフストーリーはどれもさまざまな色彩によって彩られており、小説の題材にはことかかない。可能性を秘めた素材をどのように生かすか、その工夫次第でさまざまな方向性を考えることができる。すぐに思い浮かぶのはビジネス分野での生かし方であり、それまでに蓄えた能力を思う存分発揮して起業し、事業を立ち上げる。可能性はビジネスの分野に限らない。社会のために能力を生かし、多くの人々が幸せな気持ちになれるように活

動する。個人やその集まりである社会、あるいはそれらが存在する地域がもっている固有の価値にもっと光が当てられてもよい。インターネット以前とは異なり、いまや世界のどこからでもその価値を発信することができ、同時に探すこともできる。

### ローカルからグローバルへと転化する世界遺産

世界遺産への登録は、ある場所やそこに立つ建物、あるいは自然的に形成された景観の普遍的価値を国際的視野から認めることである。それは民族、人種、国家の違いを超えた人類全体にとっての意味があるというまさにグローバル価値を見いだす行為である。認定過程では遺産を維持してきた地域による熱心



写真8 九州・有田焼の産地で見かけた陶磁器製の不思議なからくり時計。(2009年11月)

な働きかけがあろう。指定すべきかどうか、判断材料を得るための情報収集も行われる。しかしいったん世界遺産として認定されれば、人類全体の財産としてのお墨付きがえられ、他の観光地とは別格の価値が付与される。幾分の不透明さは残るが、ローカルなものもグローバルなものへと転化する一瞬をわれわれはそこに見る。

世界遺産への指定をめざして、各地で運動が行われている。観光産業的に盛り上げようという意図がどこかに潜んでいるとはいえ、これまでローカルな場所で地元の人々が営々として守ってきた営みには、やはり感心させられる。はじめから世界遺産の指定をめざしたとは思われず、ただ純粋に世代を超えて守るに値するものという意識のもとで保護されてきた。遺産そのものもさることながら、そのような保存運動それ自体が尊く価値あるものと思われる。こうした事例は世界遺産に限られた話ではない。日々、生まれている多くの工業製品の分野においても、その価値を信じてつくり続けている個人や企業がある。当初はその真の価値が理解されず、広まることはない。しかしやがて口コミなどで価値が広まり、世界市場へ向けて出て行く。世界中の人が普遍的価値を認めれば、自ずと広まっていくという事例である。

### 日本的な文化スタイルのグローバル化

日本は工業製品の分野で価値を生み出し、世界に向けて製品を送り続けてきた。お家芸ともいえる日本のものづくりは、確固とした生産技術に支えられ、社会的貢献意識がその土台にあった。しかし工業生産の海外流出が日常化している昨今、ものづくり技術の国内での継承が危ぶまれている。工業生産の海外流出は、それ自体、グローバル化現象の一部である。日本的な生産様式が海外に広まっていく代償として、元のローカルな場所では空洞化が起きている。世界遺産のように場所に固着した「不動産」とは異なり、生産技術や流通システムは、条件さえととのえばどこ



写真9 瀬戸物まつりで、胴体が磁器製の太鼓をたく路上パフォーマンス。(2008年9月)

へでも移動していく「動産」である。生産技術の国内での維持や発展を願うなら、それにふさわしい体制を構築するしかない。すでに多くの企業では、国内の工場をマザー工場につくりかえ、高い先進性を武器に海外工場の模範やモデルとして生き残れるような体制をとっている。

日本の生産技術や流通システムの底流には日本文化があり、文化の力が技術やシステムを支えている。文化はもともと幅広い概念であり、社会全体で共有される価値観や生活様式などがその中に含まれる。工業生産や流通業務を行う日本人の身体の中に染み込んだ行動様式や思考パターンが自ずと現れる。それ自体ひとつの価値であり、世界の人々の生活向上に役立つのであれば、広まっていくのは当然と言えよう。生活向上の中には精神的

な豊かさも含まれる。日本人の精神性とどこかで深く結びついている日本のアニメーションが世界中の子供の心を引きつけている。近年はアニメーションに限らず、日本の伝統的文化それ自体に対して関心を抱く人々が海外で増えている。和食のように身体の中に取り込まれるもの、和式旅館でもてなしに代表されるホスピタリティー、それに日本企業が経営する海外の塾など、日本的文化の良さが広く受け入れられるようになった。

## 再び地理学の世界へ

地域を対象として研究を行ってきた地理学は、普遍と個別の両方の間をさまよってきた。実験中心の理系の学問とは異なり、もともと実験で確かめることができない歴史的に形成された地域や都市を対象として研究が行われてきた。個別的存在があたりまえであり、個別を貫く一般性や普遍性に目を向けることは少なかった。しかし、東西冷戦体制以降、米ソの宇宙競争や科学競争のもとで科学がもっている普遍性に対する要求が高まり、地理学でも地域差を超えた普遍性に対する関心が高まった。個別の地域や都市がもっている膨大な情報を精査し比較・分析することで、共通性や一般的傾向を導こうとした。

もとを正せば、地理学は人間が世界をどのように認識してきたかを指し示す学問である。以前の表現方法はもっぱら記述であったが、第二次世界大戦後は、モデルや理論を用いた科学的表現が重視されるようになった。そして現在、表現方法は多様化し、情報社会にふさわしく地理情報システム (GIS) という強力な方法も加わった。限られた学問的エネルギーを研究に投ずる場合、広く薄く投入するか、あるいは狭く深く投げ込むか、そのいずれかである。普遍性を追求するグローバル化は前者であり、後者はローカル化するなわち個々の地域の個性を引き出す方法である。グローバル化が進めば進むほど、ローカルなものの価値が高まるというパラドックスは、今後も変わらないであろう。グローバルとローカルのはざまを歩き来しながら、地理学は伝統的な二元論を背負っていく宿命にある。

### 引用文献

1. Badcock, B. (2002): *Making Sense of Cities: A Geographical Survey*. Arnold, London.
2. Hartshorne, R. (1939): *The Nature of Geography: A Critical Survey of the Present in the Light of the Past*. The Association of American Geographers, Lancaster, Pennsylvania. 山岡政喜訳 (1975): 『地理学の本質』古今書院。
3. Harvey, D. (1973): *Social Justice and the City*. Arnold, London. 竹内啓一・松本正美訳 (1980): 『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ。
4. Johnston, R. (1983): *Philosophy and Human Geography*. Arnold, London.
5. Pacione, M. (1997): *Britain's Cities: Geographies of Division in Urban Britain*. Longman London.



写真10 中山道・木曾路の入口に立つ国境の碑。(2011年3月)